

# 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Breastfeeding and risk of febrile seizures in the first three years of life:  
The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

3歳までの熱性けいれん発症リスクと母乳栄養期間の関連:エコチル調査より

ユニットセンター(UC)等名:高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:Brain and development

年:2021

DOI: 10.1016/j.braindev.2021.10.008

筆頭著者名:満田 直美

所属 UC 名:高知ユニットセンター

目的:

熱性けいれんは、38°C以上の発熱に伴って起こるけいれんで、発症には遺伝的な要因の関与が大きいほか、環境要因など複数の要因が関連しているといわれている。本研究では、環境要因の中でも乳幼児期の栄養方法に注目し、熱性けいれん発症と母乳栄養期間に関連があるかを検討した。

方法:

熱性けいれんの情報は質問票で把握し、1歳から3歳までのいずれかの調査で「熱性けいれんと診断されたことがある」と回答したものを「診断あり」とした。母乳栄養を行った期間は、質問票の回答に基づいて生後6か月まで、6~12か月、12~18か月、18~24か月、24か月以上の5群に分類した。母乳栄養を生後6か月まで行った群を対照として、各群の熱性けいれん発症のリスク比について、修正ポワソン回帰分析を用いて算出した。

結果:

解析の対象となった84,321人の子どものうち、6,264人(7.4%)が3歳までに少なくとも1回は熱性けいれんを経験していた。母乳栄養期間が長くなるほど熱性けいれん発症リスクは低下する傾向にあり、母乳栄養期間が6か月未満の群と比べると、24か月以上の群では調整リスク比が0.86(95%信頼区間 0.79-0.95)であった。完全母乳栄養と混合栄養の間には熱性けいれん発症リスクの差はみられなかった。

考察(研究の限界を含める):

母乳栄養期間が長いほど、3歳までの熱性けいれん発症リスクが低下する傾向が示された。しかし、熱性けいれん診断の情報は診療録からではなく家族から得ていること、熱性けいれんの持続時間やけいれんのタイプについての情報がないこと、熱性けいれんの家族歴についての情報がないことなどが研究の限界として挙げられる。また、サンプルサイズ(解析の対象となった人数)が大きいことは研究の強みである一方で、注意点のひとつでもある。つまり、サンプルサイズが大きいため統計的に有意差がみとめられたものの、熱性けいれんについては遺伝的要因や発熱頻度などの他の要因の影響が大きく、これらに比べると母乳栄養の影響は小さいと考えられる。

結論:

本研究により、母乳栄養を長く継続することは、わずかではあるものの熱性けいれん発症リスクの減少と関連する可能性が示唆された。